

V 第II黒色土層上面にみられた獣の足あと等

Ta-c層除去後のII黒層上面で、径数 cm から 10 cm 内外、深さ 2～3 cm のくぼみが 30 cm ほどの間隔で、点々と続いているのが発見された（図 47、図版 26）。シャベルやじょれんを用いて、火山灰除去後の清掃を行なったところ、腐植土の表面にくぼみがあり、軽石粒が象嵌されたような状態で検出されたものである。分布は、図 47 に示すとおり、調査地区のほぼ全面にわたっている。これらのくぼみの配列は、線状をなし、大部分は直線的であるが、一部で旋回したり交差したのも認められる。配列を微視的にみると、一直線に続く部分、やや千鳥状になる部分のほかに、2 個は直線方向でつぎの 2 個がこれと交差するように配される、石けりの“ケンケンバ”のような形のものもある。

これらは動物の歩行のあとと考えられるものであるが、残されてから Ta-c の降下までには若干の時間の経過があったらしく、プリントは鈍くなっており、足指または蹄の形はわからない。しかし、これらの足あとは、歩幅約 30 cm で、平面形が円形であることから、ヒトのものとは異っている。もちろん、鳥類は考えられない。したがって、これらは何らかの獣の足あとであろうが、動物の特定は困難であった。

北海道警察本部鑑識課の石膏型採取による鑑定では、動物の種類を明らかにすることはできなかったが、北海道開拓記念館主任学芸員門崎允昭氏は、現地調査の結果、歩行の特徴から、大部分についてはキツネ、一部についてはウサギの可能性を指摘しておられる。遺跡におけるこのようなものの調査例はきわめて少なく、かつ、脆弱なために保存が困難であり、調査工程の関係もあって、上記 2 氏のほかは、専門家の応援を得ることができなかった。

以上のように、これらの獣については不明な点が多い。人間との関わりも不明である。Ta-c 層との関係から足あとが残されたのは縄文時代晩期末葉のころであり、後述（VI章）する V 群 c 類土器の時期に相当するが、この時期の遺物の分布は稀薄で、関連を見出すことはできない。また、T ビットを獣の陥し穴とする説があるが、29 個発見された T ビットはいずれも Ta-c 降下時には埋まりきっていることが確かなので、これとも関係はない。

興味深いのは、当時の環境であろう。門崎氏があげた動物の体重は、せいぜい数キログラム程度である。これらの小獣の足あとが付くには、地面が十分軟いことが必要である。美々 8 遺跡は、美沢川との比高十数 m の火山灰性の台地にあり、地表水はかなり浸透しやすいはずである。雨後や融雪期としても、地表面の植生が問題となろう。このようなことから推測すると、少なくとも足あとのある部分だけでも裸の地面でなくてはならない。それも、かなり広範囲にわたっているらしいので、今後、Ta-c 軽石降下直前の植生の研究とあわせて検討する必要がある。

また、I 黒層上面で道跡としたものに類似の浅い溝状のくぼみが、数カ所から検出されている（図 47）。長さ 20 m を超えるものはないが、e-65 南東隅や c-65 南西寄りのものは、平地あるいは尾根上にあり、地表水の流路とは考えにくいので、さきに I 黒層上面でみたのと同様、道の痕跡としてよいものかもしれない。

なお、獣の足あとの一部については、①土壌ごと切り取って樹脂で保護する、②地面に樹脂を塗布して転写する、の 2 方法により保存した。

（森田知忠）